現代日本の差別意識

堀口牧子

現代日本の差別意識

1978年2月15日　第1版第1刷発行

著　者　堀口牧子
© 1978年

発行者　竹村一

印刷所　暁印刷株式会社

製本所　熊倉製本所

発行所　株式会社　三一書房
東京都千代田区神田駿河台2の9
電話 03 (291) 3131～5番
振替 東京 9-84160番
郵便番号 101

落丁・乱丁本はおとりかえいたします　三一新書 870

現代日本の差別意識

堀口牧子著

三一書房

現代日本の差別意識——目　次——

第一部　現代日本における差別意識の諸相

第一章　差別意識論　7
——若い世代の意識分析を中心として——

第二章　生きている〝自警団〟　57
——京都韓国学園建設反対運動の中にあるもの——

第三章　糾弾をとおして私は変った　81
——ある差別事件当事者Kさんからの聞き書——

第二部　何が差別を支えているか　111

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

第一部　現代日本における差別意識の諸相

第一章　差別意識論

——若い世代の意識分析を中心として——

若い人たちのなかには、漠然と、自分たちの時代になれば差別はなくなるだろう、と考えている人が多い。差別があるのは古い考えの大人たちが今の世の中を動かしているからで、そのような遅れた、囚われた意識から自由な自分たちが社会の中心になるころには、差別の問題は解決されているだろう、という。

そしていま、これは若い人たちの漠然とした考えにとどまらず、一つの理論として形を成してきている。

——労働者階級を中心とする民主主義運動の発展のなかで、国民の民主主義思想は戦前と比較にならないほど進んでいる。そのなかで部落に対する差別観念もいちじるしく変化して

いる。（『部落』75年8月号、「マスコミと部落問題」藤谷俊雄）

――部落についての誤った考えや俗説を信じこんでいる人は、若い世代のあいだではたいへん少なくなっています。あからさまな就職差別もより減少し、……部落内外の諸条件が大きく変化するなかで、明らかに部落差別はうすらぎ弱められ、解消の方向にむかっています。（『部落』75年臨時号、「部落問題の今日的情況」杉之原寿一）

――とくに戦後にあっては、教職員組合の結成、自主的な民主教育運動の急速な発展につれて、戦前のような残忍非道な差別は著しく減少し、児童・生徒の交遊関係ひとつとってみても、国民融合は着実に前進しています。（『部落』76年5月号、「部落問題が提起する教育課題と解決への展望」西滋勝）

反差別的主体形成の問題をぬきにして、「状況はよくなっている」という漠然とした現状認識に一切の望みを託してしまう姿勢は気にかかるが、ともかくここでいわれていることがほんとうであるなら、それはたしかに一歩前進にはちがいない。だが、この認識が幻想にすぎないとすれば、部落民の自立的な闘いを武装解除させようとすることにつながるこの理論は、巧妙な差別主義に転落せざるをえない。若い世代の意識状況をわたしたちはどのようにとらえるべきなのか。ここで主張されているように、差別意識はうすめられ、解消の方向にむかっているのか、それとも「残忍非道な差別」は表面的には減少したとしても、形をかえ、

いまだ根強いものとして存在しているのか。形をかえているとすればそれはどのような特徴をもっているのか。――これがわたしがこの小論で検討してみたいと思う第一の問題である。

わたしはこの六月、わたしが勤務している短大で、約一〇〇名の学生を対象にアンケートを試みた。設問の内容は「被差別部落の存在をいつ、どのような形で知ったか。その後当初の認識が変るような契機があったか」ということを中心に、部落差別について日頃考えていることを自由に記述してもらう、というものであった。記名にすることによって、タテマエ論理によるきれいごとのみ書かれては、意識の実態にせまることはできないので、無記名でも良いことにした。実際わたしはこのアンケートによって学生のホンネの片鱗でもつかみたかったし、それによって学生の何に、どのように働きかけるべきなのか（逆の過程＝働きかけられるということも含めて）という自らの課題を少しでもはっきりさせたかった。

わたしの授業をたまたま受講したという偶然的集団にたいして試みたものであり、しかも学生は全国から来ているのであるから、それを日本社会の若い世代の意識状況の一つの縮図とみてもそれほど的はずれにはならないだろう。

多くの学生に共通するある心的パターンがあった。いまそれが偶然的個人的な反応ではなく、共同意識、集合的意識とでもいっていいものであることを示すために、そのできるだけ多くを原文のまま引用しよう。（以下番号を付したものはすべてアンケートからの引用）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

——①私は意識してしまったことはたしかだが、その子にむける友達づきあいはみんなと変りなくやって来たような気がする。しかしどうしても被差別部落の人間ということがわかってしまうと、その子に向ける目というものは意識してしまう。

——②知らなければそのまま特に気づかうこともなく話せただろうと思う人とでも気をつかいながら話さなくてはいけなくなったような気がする。

——③部落出身者と知ると意識しないようにしようと意識したのだから、このようなことも差別につながるのかもしれない。

——④その人（被差別部落出身者）のまえで、できる限りその問題についてふれないように会話で気を使ったりする。

——⑤意識しないでおこうとするが、やはり意識してしまう。

——⑥なるべく意識しないようにと自分にいいきかせていた。

——⑦意識しなかったといえばうそになる。なんとなく普通の人と話すようにはいかなかったし、その子にとる態度もなんとなくよそよそしかったみたいだ。

——⑧公の建前上、この人に差別意識をもった態度で接することはやめようと心がけた。つまり必要以上に被差別部落の人を意識していた。

——⑨クラスの話しあいのときにも「私は中学校のとき、部落差別について初めてききま

したが、やっぱりその後、意識するなといわれても何となく無意識のうちに今までとちがった感情をもつようになって、その人に対して大変悪いと思った。でももし私が一生、部落差別ということを聞かされなかったら、私はそのまま何もしらずに、そして何の意識もなく、その人とずっとつきあえただろうし、私自身その方が幸福だったかもしれない」という意見の人が三分の一以上いたようです。ある意味で私もその一人だったようです。

——⑩こんなこと（部落差別）はあってはいけないと思ったが、あまりにも特別にとりあげすぎると思う。かえって変な意識をもってしまうのではないか。

——⑪被差別部落の存在をしったのは、小学六年生ぐらいの時で、そのときはまだはっきりとは「部落」という言葉をきかず、親から〇〇町へ遊びに行ってはいけないといわれたくらいです。初めて知ったとき、正直いって仲の良かった友達が被差別部落出身であると聞いたときはとまどいました。何といったら良いか分らないけれど、複雑な心境でした。それに友達と話すときもやはり前より意識してしまい、どうしたら良いか分らなかった。友達も私と同様に何かを感じていたのかもしれません。

——⑫クラスに部落の人がいると、自分では差別はいけないと思いながらも、話すときにこんなことをいっては差別にならないか、又は傷つけないかなどと、他の友達には使わない神経をしらずしらずのうちにつかっていることがしばしばありました。

——⑬私がうまれてからずっと仲の良かった姉妹のようにしてきた友達が部落出身であったことを聞かされた。母は私が高校へ行くようになってから、妙に彼女とのつきあいをいやがった。私はなぜか分らなかったが、その話をきかされあぜんとした。今までは遠い存在であった部落ということを、目の前にみせつけられた気がした。私は差別はいけない、彼女が部落出身であっても私には関係ない、彼女は彼女だ、とその時は強くいいはった。しかしその後の私の心はじょじょに変っていった。「彼女は部落出身である。しかし差別はしていけない」常に彼女といるときは、その気持をもちつづけ、うっかりしゃべることもできず、何かつっかえるものをもって彼女と接していた。年がたつにつれ、彼女とは別の学校のため、接する機会もへってきた。その時私はすごくおちついた、妙な安心感をおぼえていた。

——⑭中学校の同級生にそのような人がいたと思います。みんな口には出さなかったけれど、心のどこかでは差別意識があったと思います。私も含めて。差別してはいけないと思っても、知らない間に差別的な目でみていたと思う。高校で歴史的なことを少しやったが、それでもまだ差別ということはよく分らなかった。中学校の時のあの人は、やはりそういう人たちの中に入っているのか、と思った。

このような、日常的には内部に閉じこめられている意識の内実を明るみに引き出して、記

述してゆく作業は心重い。だがこれはまぎれもなくかつてのわたしの意識（いまもその痕跡を残しているだろう）と重なるし、ほのみえているのは、わたしにつながる人間たちのありのままの意識の片鱗だ。これらの文字の群は、どれだけ他者を傷つけるものであるか。彼らがところどころで述べている「気をつかう」という態度は、ある言葉や身ぶりがどれだけ人を傷つけるものであるかということにたいする人間的感性ではおそらくない。不自然な表面的なとりつくろいにすぎないだろう。もしそのような人間的感性が彼らの内に息づいているなら、それは決して「意識しない」自己に固執しようとはしないはずだ。そして意識しないでおこう——意識してしまうという心理的緊張に疲れたとき、関係自体を断とうとする、そのようなことも起りえないはずだ。彼らが意識する自己をつきぬけ、いかなる形で意識すべきなのかを自問するなかで、どのような出会いが可能であるかの試行にまで至る道があるはずだ。だがそこへ行くものは少ない。多くの場合、それ以前の段階にとどまっている。ほとんどの学生が多かれ少なかれ、意識しないでおこうと思う——意識してしまうという円環の枠内にいる。わずかな可能性を感じさせる文章をつぎにあげるが、これでさえ、基本的な認識構造は変らない。

——⑮幼い頃に親たちの話からえたという言葉を聞いたことがあったが、そのことが理解できなかった。小学校の六年の社会で「江戸時代にエタや非人ができた」ことを教えられ、

後はおぼえていない。中学二年になり、歴史でまた習ったが、その時はその人たちの生活や、どうして差別がつくられたかなど、具体的に教えてもらったので、上の人のつごうでつくられたものなのにそれを弱い人間同士いがみあうなんておかしいと思った。が自分の胸の底に差別意識はまだある。部落出身者であることを知ったら意識するし、その人がへんなことをすれば部落だからと思う。なぜ歴史でわかっていて、胸の中ではわからないのか。しかし小、中学校と部落の存在を教えてくれた先生にめぐまれたことはよかったと思う。教えられなかったら親の言葉をうのみにして、今よりもっと差別感があると思う。そんな自分をみつめて、教育は部落の歴史だけやってもだめだと思う。差別し、人間同士がいがみあうことによって、だれが得をし、だれが損をするかということが分れば、部落出身者だけの問題ではなく、みんなの問題であることが理解できるのではないかと思う。

なんのために部落がつくられ、なにゆえに存続させられているのか、ということを彼女は知っている。だが「なぜ歴史でわかっていて、胸の中ではわからないのか。」この彼女の問いは重要である。彼女の場合、差別観念を親からうえつけられたとはいえ、その親をとおしてあらわれた、社会に遍在する意識の存在を彼女はみなければならないだろう。それなくして彼女のこの問いはおそらく答えられないだろう。個人の意識に潜在する集合的意識、ある

いは集合的無意識がなくて、どうしてさきにくりかえし引用した、知ったとたんに意識してしまうという共通の心的パターンが形成されようか。彼女もまた「部落出身者であることを知ったら意識する」と書く。ある集合的意識が社会の中に生きていなければ、一つの事実を知ることが「意識してしまう」という心的反応を直接的に呼びおこすことはないはずなのだ。一つの事実を知ることが、このような心的パターンをうみ出す、ということのなかに、一切の問題性のカギがかくされている。「意識する」のではなく、「意識してしまう」と書かれるその表現の中に、その意識の内容はさぐられねばならない。被差別部落の像を否定的なものととらえなければ、このような表現はでてこないだろう。しかし否定的なものととらえることの差別性については、すでにタテマエの上で教えられているから、「意識してしまう」ことのアンチテーゼとしての「意識しない」態度を、あるべき態度、とるべき姿勢とみなすということがでてくる。こうして非部落民の多くは、意識しないでおこう—意識してしまうという円環のなかに閉じこめられる。

世間の目が家族や友人という直接的な人間関係を媒介とせずに、そのまま個人の意識の中に取り込まれてしまうこともある。

——⑯京都へ来て差別がいまだに続いているのをはじめて知った。(私たちの町は差別などない) その人達は差別していないところへ行けばよいではないか。しかしこのときあるか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor